

## 周囲の生徒とコミュニケーションをとることが苦手で、自己否定的な発言や考え方をする広汎性発達障害のある高校 2 年生の生徒への合理的配慮の事例

### 1. 事例の概要

A 生徒は、B 高等学校に在籍する広汎性発達障害の診断を受けている高校 2 年の生徒である。A 生徒は自分の考えを文章にすることはできるが、話の中で自分の考えを伝えることが苦手である。授業では、分からないことがあっても自分から質問することもできずに黙っていることもある。また、グループ学習の際、他の生徒とのコミュニケーションがうまく取れず、会話も自己否定的になりやすい。

B 高等学校では、校内支援委員会を開催し、A 生徒への支援について検討すると共に、A 生徒の個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、それらの計画を基に、教職員が情報の共有を図り、A 生徒が自己肯定的になれるよう、A 生徒の自己理解を促した。こうした取組により、A 生徒が振り返りを行い、他の生徒への声のかけ方や、会話での応答の仕方について少しずつ考えられるようになってきている。

**キーワード** 広汎性発達障害、自己否定的、コミュニケーション、個別の教育支援計画、個別の指導計画、教職員の共通理解

### 2. 生徒の実態

A 生徒は、広汎性発達障害の診断を受けている B 高等学校 2 年生の生徒である。通常の学級に在籍し、一斉指導で授業を受けている。知的発達は全体的に標準の範囲内であり、いずれの教科も平均的な水準に達している。自分の考えを文章にすることはできるが、自分の考えを伝えることが苦手である。授業では、教師の質問に答えることはできるものの、自発的な発言はみられない。分からないことがあっても自分から質問することができずにいる。また、グループ学習の際、他の生徒に話し掛けることはなく、コミュニケーションがうまく取れない。

### 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 校内支援委員会を設置している。メンバー構成は、教頭、教育相談係、各学年担当者、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー、合理的配慮協力員である。月に 1 回会議を開催し、支援の必要な生徒の情報交換と対応、今後の支援のあり方等について検討や確認を行っている。【基礎 2】
- A 生徒について、特別支援教育コーディネーターが助言を行い、担任が個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成している。その際、対象生徒や保護者の希望を聴取し、対象生徒に関わる教職員から授業等での様子を聞き、計画を作成している。また、計画を基に教職員が情報共有を図り、支援している。【基礎 3】
- 将来の就労に向けた支援として、合理的配慮を必要とする生徒が高校生活の中で獲得すべきスキル（挨拶の仕方やスケジュールリング等）を身に付けられるよう日常的に指導している。【基礎 7】

#### 4. 合意形成のプロセス

B高等学校に入学後、A生徒の保護者から、A生徒が自己否定的になりやすい面があること、周囲の人と円滑なコミュニケーションをとることが難しいことなどの申し出があった。そこで、校内支援委員会で検討し、A生徒の個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成した。また、A生徒と関わる教職員が共通理解を図り、対応していくことを確認し、その旨を保護者に伝えて合意を得た。

#### 5. 合理的配慮の実践

- A生徒の自己否定的な発言や考えに関して、周囲の支援者がその内容をメモに書き取り、そのメモをA生徒とともに見ながら振り返りを行う。事実との相違や矛盾を確認しながら、A生徒が自己肯定的になれるよう、A生徒の自己理解を促している。振り返りを行うことで、他の生徒への声のかけ方や、会話での応答の仕方についてA生徒が考えられるように配慮している。【合理①-1-1】
- 分からないことがあった時には、A生徒自ら質問することが大切であることを伝えて、A生徒が自発的に質問できるように促している。【合理①-1-1】
- A生徒が自らコミュニケーションを図ろうとした時には、教職員が肯定的な声掛けを行うように配慮し、会話することに自信がもてるようにしている。【合理①-2-1】
- 各授業中に可能な範囲でグループ学習の場面を設定して、コミュニケーションを図る機会を確保した。グループ学習では、一人一人に役割を与えてA生徒にも発言する機会と他生徒とのコミュニケーションを図る機会を確保するようにしてきた。【合理①-2-2】
- A生徒のコミュニケーションを促進するために、A生徒の座席の周囲には、A生徒が気軽に話しかけられる生徒を配置している。【合理①-2-3】
- 合理的配慮協力員が授業見学したり、A生徒や保護者、関係教職員との面談を継続的に行ったりして、A生徒への効果的な支援についての専門的な助言をしている。【合理②-1】

#### 6. 本事例の成果と課題

本事例の成果として、A生徒に対する個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、教職員間で支援や指導についての共通理解を図り、自己肯定感を促すような言葉掛けによって、A生徒が困っていることや聞きたいことを教職員に言葉で伝えられるようになってきたことが挙げられる。また、教職員の対応について理解し、A生徒への対応を考える生徒も出てきている。

今後もA生徒が周囲の生徒とコミュニケーションを取れるようコミュニケーションに関する成功体験を積み重ね、更に将来の就労に向けて、職場の人とも円滑なコミュニケーションが取れるように支援を続けていきたい。